ああ、恥ずかしい私の失敗談

大学二年生の夏のことです。私の大学のワンゲル部は余市岳の麓に白井小屋という小屋を所有していました。（現在は焼失）その目の前には小川が流れており、70代くらいのOBの話によれば源頭は綺麗なお花畑が広がり、とても気持ちのいい場所だとか。ネットで検索してもその沢の遡行記録は見当たらず、冒険心がむくむく湧いてきました。

夏休みのある日、ザックを背負い自転車で定山渓の余市岳登山口まで向かいました。予定通り、小屋の前から入渓。沢足袋は部室のダンボールに眠っていたものを拝借しました。足元ではイワナが飛び跳ね、熊と出会わないか不安になりながらも心躍るようでした。なぜなら初めての沢登りだったからです。道中で二段の滝が現れ5mくらいですが直登したときはおもわず声を上げてしまったほどです。だんだんと源頭に近づくにつれ水は枯れ、強く雨が降ってきました。源頭はお花畑というよりかはヌルヌルした草の斜面といった感じでなんとかテントを設営しました。大雨のせいでテントの中は湖状態でしたが、なんとか一夜を過ごしました。

二日目はいわゆる飛行場という場所を余市岳登山道まで突っ切る計画でした。しかし、それを遮るように熊笹がそびえ立っています。笹に分け入って入っていき2時間ほど藪を漕ぐと開けた場所に着きました。そこはなんと一夜を過ごした草原でした。つまりぐるっと一周していたのです。もう一度笹に分け入り、また2時間ほど進んで休憩することにしました。ザックを開けると水筒代わりのプラティパスに満タンだったはずの水が一滴も残ってないことに気づきました。実は穴が空いていたのです。そこからは地獄でした。笹の葉の表面に溜まった雨粒をすすりながら笹を漕ぎ、脱水状態の中、竹槍のごとく硬くなった笹の枝に逆らいながら斜面を上がる気力もありません。今どこにいるかも分からず、周囲ではガサガサと獣が近寄ってくる音が聞こえるように感じます。母親にこんなところで死んでしまってごめんなさいと謝りながらしばらく笹やぶで横たわっていました。それからなんとか気力を振り絞って登山道に出たのですが、時刻はもう夕方。水を分けてくれる登山客もおらず、自分の小便をコッヘルに入れて飲みましたが、とても不味くて飲めるものではありません。そうしているうちにどこからか足音が聞こえてきました。地質調査をしている業者の方でした。その方々から水を分けてもらいキロロ側に一緒に下山、札幌まで送っていただいたのでした。その方々からはお前はもう山に行かないほうがいいと言われました…

命の恩人、地質調査の方々あの時はありがとうございました。

記　森　海人